

茶の湯 文化学会 会報

第123号 / 2024年12月24日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

『雑記集』からわかる周辺のこと 八尾嘉男

昨年、私は裏千家十一代・玄々斎の高弟による日記『雑記集』を翻刻紹介する機会（『茶書研究』十二、茶書研究会、宮帯出版社制作・販売、二〇二三年）をえた。そしてせっかく翻刻をしたのだから『雑記集』を素材にした報告をと考えてはいるのだが、私の怠けによって報告にはまだまだ時間がかかりそうである。そのようなか、すぐに見ていただけの会報であれば報告よりもさきに『雑記集』のことをより多くの皆さまに知ってもらえると思ったのが、この小稿のはじまりである。

一、『雑記集』の作者と日記の期間
翻刻とともに『茶書研究』十二に収録される拙稿「解題にかえてある玄々斎高弟による明治初年の日記『雑記集』の紹介」（以下、「解題にかえて」）のくりかえしになるが、『雑記集』は宮下玄覇氏による文庫、宮帯文庫の所蔵である。裏表紙に「逸玄所蔵」とあり、逸玄を日記の作者とみるのが自然であるが、断言するには決め手ももう少し欲しいという考えにいまも変わりはない。玄々斎のお使いに出かけたり、玄々斎の動向を書き残しているのが、玄々斎自身の日記ではなく、高弟によることは確かである。

この高弟は京都に住んでいたが、玄々斎のお使いでたびたび堺および周辺を訪れ、一茶人としても活動していることから土地勘があると考えられる。そこから和泉国（大阪府南部）出身とまでいうのは推測が過ぎるように感じてためらいがあるが、少なくとも堺もしくはその周辺に地縁のある門弟である可能性は高いと思われる。

日記の期間は明治四年（一八七二）三月八日から翌五年十二月二日までである。松山県庁への届け出を経て明治四年九月に公表される玄々斎隠居、又妙斎の家元継承の時期になる。裏千家の節目をみていることは、この日記の貴重さを示す大きな理由になる。

日記の作者は明治四年四月二十四日～五月二日、体調を崩したために堺を経て帰京する予定がかわらなくなった明治五年二月三日～二月十八日、三月二十九日から五月一日までと五月八日から七月二

十日まで以外は、多くて五日前後の空白は散見されるが概ね丁寧に書き残している。拙稿「解題にかえて」は欠落期間の提示に不備があったので、拙さをお詫びするとともに改めて長期の欠落期間を記しておく。明治五年正月十九日の条に「稽古始。別記アリ」とあり、日記のほかにも書き残したものがあつたようだ。

二、日記ならではの周辺の記録
「雑記集」と記された表紙をめくると、「真ノ台子的伝」という書き出しから真ノ台子的伝の相伝を受けた門弟四十人の名が最初にある。「認得齋門」の併記もあり、先代認得齋の門弟も含まれている。この相伝者リストだけを見るとならば記録といいたくなくところだ、つづく内容が日にちごとでできごとが長期にわたって記しているのだから日記であることは明らかである。「雑記」をタイトルにふくむ日記の例には奈良興福寺の

塔頭・大乘院の住職三代が書き継いだ『大乘院寺社雑事記』がある。

日記によって四月十四日の引越しの荷物の到来から翌日の玄室（又妙齋）の裏千家人家、二十日の両千家（表千家・武者小路千家）と久田家、出入方を招いての入室お祝い、二十一日の門人たちへのお披露目とお祝い、二十二日の台所・出入方へのお披露目とお祝いと、家督相続の承認を公的に伝える以前、又妙齋が裏千家に入家したときからのできごとがはっきりとわかる。出入方が二十日と二十二日にみえるが、二十二日の出入方は台所まわりの出入方に限られ、翻刻で「台所・出入方」と分けた「・」は不要だったかもしれない。いずれにしても二十二日はより内向きであろう。
明治に改元されて社会状況が大きく変わったなか、時代に翻弄される姿かと思いきや、散策や参詣に出かけるなど、嵐の前の静けさといったくなる穏やかな日常もわ

かる。

そして日記ならではのできとも触れられている。具体的には明治五年三月十日から六月三日まで開催された第一回京都博覧会がまずある。ほかにも博覧会とされているものに、「大宗匠（玄々齋）」と「若宗匠（又妙齋）」のお供で西六条博覧会を展覧したと記している（明治四年十月二十一日）。前者の第一回京都博覧会は三千家に参加しており、袋師や釜師、樂家、塗師なども交えた寄り合いを行ない、新たに品物も挑えていることを書き留めている。立礼卓については、はっきり断定できるものはない。
ほかに日常のできごとでわかるのは災害の様子である。日記の作者は災害の有無に関わらず天候はマメに記しているが、災害で大きなものは明治四年五月に四国・近畿地方を中心に発生した大規模な水害である。日記の作者自身は被害状況をさほどは目にしていない

ものの、比較的広範囲な地域の様子を知らされていた。五月十七日、玄々齋のお供をして鞍馬山と貴船神社に参詣にかけた帰りから大雨は始まっていて、翌日には強風も吹いていた。被害の状況は十九日に大坂屋七五郎からの「届（手紙）」によってもたらされ、そこには大阪と神戸、兵庫、武庫川沿いの地域の被害状況が報告されている。京都は強風の被害が大きく、十七日の帰路に傘を借りた鞍馬二ノ瀬の平馬が二十一日にやってきて話すところによると、貴船神社の拜殿が崩れた上に大木がこけたこと、若狭街道と丹波街道でも大木によって道が塞がれた箇所があることなどがわかる。

もう少し茶の湯以外のことを話すのを許していただきたい。明治時代に入り、神社は神仏分離令に端を発する廃仏毀釈の風潮によって日本国内すべてで荒廃したイメージがある。ところが日記からは明治四年に太政官から布達され

た「社寺領土地令」を間にはさみつつも意外におだやかな一面もあつたことがわかる。ただ日記の作者が頻繁に通っていた正伝院は何かしらのできごとが起こつたと思われ、これについては今後考えていきたいと思つている。茶の湯と茶の湯以外のできごとからかいつまんだようなものになつたが、新たに『雑記集』の存在を知つてもらえたのであれば幸いである。

例会

東京例会

(令和六年七月六日)

「文徵明と恵山泉」

張茹涵

文徵明(一四七〇—一五五九)は明中期における詩書画三絶の人物です。九回の科挙落第を経験して、五十四歳にやっと推薦で中央の官途へ赴いたが、結果、三年で挫折して帰郷し、その後蘇州文化

圏を担った第一人者となりました。文徵明が科挙試験に落第し続けた理由は、彼の選択として「上守谿先生書」(一五〇九)に関連記述が収まっています。また、発表者にとつて、文徵明が中央で経験した三年間と当時の大札の議という出来事の重なり、彼の心境の変化に興味深く感じ、その理由も本発表で述べました。

蘇州文人が恵山泉について愛着がある大きな理由は、倪瓚(一三〇一—一三七四)という人物への憧れと無縁ではないでしょう。文徵明は直接に倪瓚へ憧れを示したのではなく、彼の師であつた沈周(一二二七—一五〇九)、呉寛(一四三三—一五〇四)の影響を受けて、その時代の醸し出された雰囲気の中で倪瓚に憧れていたことは特徴的です。

文徵明の人生と恵山泉に関わる主な活動は、一五〇四年に三十五歳の一連の詩作と一五一八年に四十九歳で完成した「恵山茶会図」

です。「詠恵山泉」(一五〇四)という詩を読むと『茶経』から受けた影響や、陸羽に対するリスベクトは詩の中で多く詠まれているとわかりました。また、「恵山茶会図」(一五一八)は呉寛を中心に行つた恵山泉活動の拠点である聴松庵と象徴物である竹炉を絵のモチーフに入れていきます。

脈々と先人の文化を継承して来る文徵明の活動をヒントに、大学院から出た発表者は、これからも茶詩研究を片手に文徵明と共に歳を重ねていくことでしよう。

「田安慶頼の茶の湯」

依田徹

従来の茶道史において、田安徳川家については主に四代徳川斉荘(知止齋)が取り上げられ、裏千家十一代玄々斎との関係が論じられてきた。しかし五代目となつた徳川慶頼(玄黙)も玄々斎と密接な交流を持っていた。弘化二年(一八四五)には仙叟百五十年忌

に際して玄々斎が仙叟の絵像を、安政三年(一八五六)には『法護普須磨』の筆写本が献上されている。また徳川將軍家連枝である慶頼は、將軍継嗣問題に際しては井伊直弼(宗観)と政治的同盟者となり、南紀派の中核となつていた。

このため直弼の茶会記には三度慶頼が登場している。安政七年(一八六〇)年に直弼が暗殺されると、復権した一橋派により隠居に追い込まれることになる。この隠居時代に慶頼は、玄々斎に依頼して裏千家の茶室である「又隠」と「稽古の間(咄々齋)」を写している。今回田藩文庫から二代木村清兵衛の「積り書」が見つかり、「又隠」の竣工が慶應三年(一八六七)であることが確認できた。また慶頼は明治期の東京で茶会を楽しんでおり、明治五年(一八七二)十月には有栖川宮職仁親王を正客とした口切り茶事を催しており、その話には京都から出向いた千宗室(玄々斎)が入っている(『職仁親

王日記」。この時期、裏千家業躰である中田宗閑（松陰庵）や久留玄空が田安家出入りの宗匠となっていた。徳川慶頼は特に玄々斎の重要な後援者かつ井伊直弼の政治的パートナーであるという点に特徴があり、慶頼に注目することでこの二人の動きが同期されるのである。

（令和六年九月二十八日）

「光悦黒楽「七里」の銘について―『七里家代々直筆』（射和文庫蔵）を端緒として―」
岩田澄子

「七里」は光悦七碗の一つだが、肝心の七里彦右衛門は不詳とされる。一方発表者は、射和文庫（松阪市）で竹川竹斎の茶書『川船の記』に秘匿された桜田事変史料を発見したのを機に、史料の存在を知り考察を始めた。井伊直弼は彦根藩主だが、七里家は彦根藩御用達の京都の呉服商で、竹斎の祖母の実家だったのである。

茶書を見ると、有岡道瑞『茶湯百享百会』の亭主は、第一会が千宗左（表千家五世）で、第七会は七里彦六であった。また『傍求茶会記』（巻五）の仙叟宗室（裏千家四世）第三十六会に、七里円順と彦六が参会している。そして『七里家歴代直筆』には彦六宛の大名の書簡があり、七里家には彦六のような茶人が実在したといえる。

ここで悩ましい問題が発生した。『七里家歴代直筆』の諸大名からの書簡（約六十通）は大半が奈里（なり）宛である。また『京羽二重大全』や彦根藩史料からも、「七里」を（なり）と呼んでいる史料が確認できる。光悦の「七里」は今後、何と呼ぶのがよいのか。すると滋賀県の五個荘町七里（現、東近江市）は、「しちりの里」とよばれ（一五一九年、「伊勢道者売券」輯古帳）、慶長年間から彦根藩領であった。近江商人発祥の地として知られ、主な取り扱いは呉服など繊維関係だという。そ

こで発表者は、「七里」という苗字は出身地（しちり）由来の名で、（なり）はニックネーム。茶碗はこれまで通り（しちり）と呼んで問題ない」と考えるが、いかがであるうか。そして時には諸大名のように、ニックネームの（なり）で呼んでみるのも楽しいかもしれない。

「MOA美術館創立者・岡田茂吉の生涯と茶の湯」新史料を中心にして」

岡宏憲

岡田茂吉（一八八二―一九五五）は熱海のMOA美術館と強羅の箱根美術館の創立者で、その前半生は実業家として活躍したが、度重なる不幸から宗教に救いを求め、大本の宣教師を経て、昭和十年（一九三五）に現在の世界救世教の前身となる大日本観音会を立ち上げた。

岡田の茶の湯に関しては拙稿「岡田茂吉と近代茶道」を参考に

されたいが、岡田の生涯については教団から教祖伝が刊行されて以降、長らく後続の研究がない状況であった。一方、資料集として『岡田茂吉全集』が刊行されるなど研究環境が整備され、また国会図書館デジタルの検索性向上により、岡田に関する官報ほか諸資料へのアクセスが容易となったため、新出資料から岡田の生涯を再度解き直す試みを行った。

特に従来の研究から異なる新発見としては、岡田が入学したのは東京美術学校（現在の東京藝術大学）ではなく予備校である共立美術学館であったこと、また岡田が経営した岡田商店については、岡田の右腕であった木村金三が丸茂商店という別会社を設立していたことや株式会社化した後に製造販売会社の合名会社岡田商店を設立したことなどが新たに明らかとなった。

岡田が大本に入信してからは、大本側の資料より昭和三年（一九

二八)に岡田が荏原支部まで出口王仁三郎を迎えに行ったが朝寝坊で遅刻したこと、同道者には歌人として有名な柳原白蓮がいたこと、またこの時、王仁三郎が岡田邸を「松風苑」(松風荘)と命名したことなどが明らかとなった。

茶の湯に関しては、昭和二十八年(一九五三)に岡田が光悦会茶会を事前見学していたなど新たな発見もあり、今後は分派教団より刊行された資料などから更なる研究を進めていきたい。

近畿例会

(令和六年十月二十六日)

「世を観る眼 白酔庵・吉村観阿展によせて」

宮武慶之

江戸時代後期の江戸で活躍した町人数寄者である吉村観阿は、若い頃は松平不昧、不昧没後は溝口翠濤と親しくした。観阿の存在は江戸の茶の湯文化とその周辺を知る上でも重要な人物となるもの

の、資料の不足から不明な点が多い。溝口家の記録をはじめ、関係する作品を多く確認できたことにより、観阿の行状の明確となった。その後も研究を継続したところ、以下の二点に関して新たな知見を得ることができた。

一点目は東大寺の寿蔵と江戸に存在した観阿の墓石である。今回、江戸に存在した観阿の墓に関する資料として、化蝶庵主による『江戸名家墓碑図録(一)』(国会図書館蔵)に注目した。本資料から江戸の築地本願寺地中の福泉寺および弘福寺にあった観阿の二か所の墓石が確認できた。特に重要なのは弘福寺の墓の存在である。墓石の形状は、東大寺に存在した寿蔵との類似性が認められ、観阿没後の江戸での顕彰という点で大きく影響したと考えられる。二点目は観阿の周辺と冬木屋旧蔵品についてである。江戸の材木商冬木屋(上田氏)は多くの美術品収集で知られる。観阿が所持し

た冬木屋旧蔵の中興名物を基点として、観阿周辺と冬木屋の関係について紹介した。従来、江戸時代後期の冬木屋は斜陽となり所蔵した器物は流出したとされが、江戸時代後期の冬木屋での所持品が認められ、江戸では依然として多くの作品を所蔵する点を明確にした。以上、二点についての報告を行った。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※東京・近畿例会では、会場とZoomのハイブリッド開催を行っています。オンラインの参加は、ホームページの例会参加申込フォームよりお申し込み

と同時に、年会費一千円(会員)・四千元(非会員)をお振り込みください。

東京例会

令和七年三月十五日(土)
午後二時

(会場)埼玉会館3B会議室・Zoom)

福島修「未定」

矢ヶ崎善太郎・村上玲奈

「根津記念館の茶室について(仮)」

近畿例会

令和七年二月十五日(土)
午後二時

(会場)同志社大学今出川キャンパス至誠館S4・会場とZoomのハイブリッド開催)

山本堯、伊住禮次朗共同発表

「胡銅製作技法研究序説」

山本堯(泉屋博古館)

「中国の儒教儀礼と日本の唐物荘厳の関係について(仮)」

伊住禮次朗(茶道総合資料館副館

長・今日庵文庫長)

「雲龍釜とその文様に関する一考察」

新刊紹介

『一億人の茶道心講 茶道観の多角性』

岡本浩一著 淡交社

定価一、四三〇円(税込)

令和七年三月八日(土)

(会場・発表者未定)

金沢例会

令和七年三月九日

午後一時三十分～

(会場・金沢文化ホール三階 第五会議室)

北春千代(石川県七尾美術館館長)

「加賀七種ノンコウ茶碗について」

高知例会

令和七年二月九日(日)

午前十時～正午

(会場・高知県立文学館 慶雲庵茶室)

茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶVI」

高知支部2025年度事業計画

お知らせ

令和七年度総会・大会のご案内

ご案内

令和七年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細は令和七年四月に郵送・ホームページにてご案内いたします。

日程・令和七年六月十四日(土)・十五日(日)

場所・横浜市(予定)

※見学会・懇親会も計画中です。

令和七年度大会発表者募集

令和七年度の研究発表者を募集

します。発表を希望される方は、

大会研究発表用概要を添えて、学

会事務局までメールでご応募下さい。

大会終了後、発表内容をベースとして論文にまとめ、学会誌『茶

の湯文化学』に投稿していただけます。

ような発表をお待ちしております。

開催日程・令和七年六月十四日

(土)

応募資格・茶の湯文化学会会員で

あること

募集締切・令和七年二月二日(日)

発表時間・研究発表二十分

質疑応答十分

・メールにて、件名を「令和七年度大会発表募集」とし、大会発表用概要を添付してお申し込み下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決定いたします。

・詳しくはホームページをご覧ください。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※事務局の年末年始の休業は、令和六年十二月二十六日(木)～

令和七年一月五日(日)となります。